

東方異形録

無意識

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、残酷な運命を辿る少女と幻想郷の物語。

目が覚めたら、そこは紅い花の咲き乱れる花畑だった。記憶の無い少女は、記憶を取り戻すため奔走する。自分の正体を知るため、魔理沙、霊夢と共に……〈第一章〉

▽東方単体の同人小説です（非エロ）▽オリジナルキャラがいやな方はご遠慮ください▽セリフなどは、なるべく原作等をベースにして作っているつもりですが、一部個人の見解で入れているところがあります。▽『この小説にあるはずだった恋愛要素を全てなかったことにした』▽作者は語彙力皆無だけど頑張ります！▽一話が短い

……▽投稿まばらに行ってます▽感想募集、これどんな感じに思ってるか知りたい

い。

▽それでもいいっていう方はゆっくりしていいってね！

目次

一日目：夜	1
二日目：朝	4
二日目：夜	8
三日目：朝	11
三日目：理解	15
過去語	18

一日目：夜

そこは、何も見えない暗闇の世界だった。どうやら感覚では水中にいるらしい。急に目の前が光った瞬間、身体に電流が走る。とても痛い。痛さで意識がだんだん遠のいていく：

気が付くと紅い花が咲き乱れる夜の花畑に寝ころんでいた。私は…誰なのだろう。まったく思い出せない。自分の顔を見たら思い出すかもしれないと考えた私はあたりには何か落ちていないかと探して歩きだした。花畑をしばらく歩くとそこに森が見えた。

森の中は案の定暗く、行った道は戻れそうになさそうだ。そんなことを考えながらふらふら歩いていっているうちに目が闇に慣れてきたようで見えるようになった。目の前に家があることにも気が付いた。今夜はもう暗い。この場所に泊めてもらおうと思つて家に近づいたが、明かりがついていなくて、鍵がかかっている。おそらく留守なのだろう。「おーなんだなんだ。私の家になんかようか？」

急に女の人に声を掛けられてびつくりしたが、言動からしてこの家の持ち主だろう。なら

「今夜、ここに泊めてくれませんか？」

私は尋ねた。

「私、自分が誰かわからないんです。目が覚めたら紅い花畑にいました。」

彼女は驚いた様子で、

「なら、向こうの世界から来たのか!?…って聞いてもわからないか。まあ入ってくれ。部屋が汚いうえにお茶くらいしかでないが。」

「ありがとうございます！」

「ああ…名前を言っただけでなかったな。私は魔理沙、普通の魔法使いだ。」

こうして、一夜目は魔理沙さんの家で宿泊させていただくことになった。よかったあ

…

「お前はなんか覚えていることはないのか？」

魔理沙さんは散らかっている部屋を片付けながら聞いてきた。

「いえ…何も覚えていないです…」

…うん。魔理沙さん。本当に魔法使いなんだ…ヘビとかクモとかいても気にしていないみたいだし…私はそういうのを気持ち悪いとは思わない性格らしかった。部屋が汚いのは気になるけど急に押し寄せたんだししょうがない。

「…ここは何処なんですか？」

とりあえず疑問に思った事を聞いてみる。

「ああ。言ってなかったか。ここは幻想郷だ。」

「幻想郷…」

どこかで聞いたことのある気がする。けど、思い出せない。片付けが終わったようで、魔理沙さんはベツトに乗って聞いてきた。

「今度はこっちから質問させてもらうが、お前は焦っている様子も何もなかったが、私に会うまで誰とも会わなかったか？」

「はい、誰にも会っていないです。」

「そうか？再思の道からここまで、この時間帯だと妖怪の一匹二匹はいると思うんだけどな…」

「あれ？私何かおかしいこと言いましたか？」

「いや、何もおかしいことはないよ。明日、当てがないなら一緒に歩いてきてくれないか？」

「わかりました。どこへ行くんですか？」

「博麗神社だよ。今日はもう遅い。寝ようぜ。」

こうして、私と魔理沙さんは就寝についた。

二日目：朝

その日、私は夢を見た。暗くて何も見えなかったが、私の前の記憶であるような気がした。とても痛く、つらい夢だったような気がする。なんせ夢だからあんまり覚えていないのだ。まあ悪い夢であることには変わりはなく、目覚めは最悪のものだった。

「おはよう。早かったな。」

魔理沙さんが話しかけてくる。そんなにも早いかと思つて時計を見ると、まだ早朝5時をまわつてもいなかった。

「おはようございませす、魔理沙さん。」

「ああ、そういうやなんだが。お前、記憶を失つてから自分の顔をまだ一度も見ていないじゃないか？見たら何か思い出すかもしれないぞ？」

そういわれてはつと気づく。鏡の位置を覚えてもらうと、私は早速確認した。が。そんなものでも思い出せるはずなかった。全然誰なのかわからない。身体的感覚から女子であることはわかつてたが、それ以外に新たに分かったのは髪の色が黒いこと、眼が金色で、服装がやたらと奇抜なことくらいだった。何とも言いようのない服装である。半袖にスカート。柄が付いているが何の模様なのかはわからない。

「なにかわかったことはあるか？」

「いえ、全然。」

「そうか……。今日は博麗神社へ行くぞ。用意が終わったらすぐに出る。用意しておいでくれ。」

「はい。」

「そういえばそういう話になっていた。今日は博麗神社へ行くという予定があったのだ。」

「博麗神社で何をするんですか？」

「宴の準備だ。今日は結構多くの……。まあいつもうるさいが、その手伝いをしにな。それと、」

魔理沙さんは私の方へ指をさし、

「お前のことを知っているかもしれない。」

といった。それから、私たちはテキパキと用意を済ませ、博麗神社まで向かった……。箒で。

「死ぬかと思った……」

「なんだ、死ぬとは物騒じゃないか。私にかかればこれくらい普通だぜ。」

人生初めての魔法の箒は、最悪の乗り心地といってよかった。速すぎるわ、痛いわで

話にならない。

「あら、魔理沙……と、誰？」

「私も知らん。彼女は記憶喪失なんだ。」

「へえー、そう。あんた妖怪……じゃなさそうね。じゃあいいわ。」

彼女は私の方へ向き直り、

「私は博麗霊夢。ここ、博麗神社の巫女よ。よろしくね。」と告げた。成程。彼女が霊夢さんか。

「はい、よろしくお願いします。」

「うん、で、魔理沙がここへ連れてきたのは大体理由はわかるわ。けど、少女が失踪したという話は聞いていないわよ？ どうしたの？ この子。」

「再思の道に寝ていたといっているんだ。彼女。もしかしたら、向こうの世界から来たのかもしれない。」

霊夢はすこし驚いた様子で、

「生きているのが不思議だわ。あそこは妖怪に襲われても不思議じゃない。」

「なんか能力があるとも思えないなあ。」

なんだ。能力で。私を会話に混ぜてほしいが我慢しよう。

「のう、巫女よ！なんか面白い話をしていると思って聞いていたのじゃが。儂も会話に

いれてはもらえんかの?」

振り向くと、狸のしっぽの生えた女性が立っていた。

「あら、ママ、ゾウじゃない。どうしたの?」

「結界の先にある所に今いたのじゃが、人がいなくなったという話は聞いていないのじゃ。おそらく彼女は、こっちの世界の住民かと思われるぞい。」

「えっ?!」

霊夢さんと魔理沙さんが同時に言葉を詰まらせる。その意味を、今の私は理解できずにいた。

二日目：夜

夜になって宴が始まった。魔理沙さんによると、ここらで妖怪は人型をとってたりするらしい。今のところ、私に対して話しかけてくるようなものの好きはいないようだ。

昼の間に萃香さんっていう鬼や、アリスさんも来たのだが、私の情報は何も知らなかった。なんでも私は幻想郷に元から住んでいたということらしい。どこまで広くとも絶対に一度は見かけられるはずなのだが。普通は。つまり私の過去は普通ではないようだ。魔理沙さんは家に一度帰った。

「おーやってるやつてる。おーいレイムっちー。」

「ん？董子じゃない。ちようどいいわ。ちよつときて。」

霊夢さんが少女を連れてこつちへ来る。彼女は董子という名前らしい。霊夢さんは私を指さして、

「この顔見たことない？今この子記憶消失なんだけど。」

と尋ねた。董子さんは、「見たことないな。」と即答した。

「そもそも私の学校のあたりで行方不明者は出ていないし。そんな服向ここの世界で着る人いないし。」

「じゃあ彼女は幻想郷の住民ってことでいいわね……もしかしたらあいつからなら少し情報を得られるかもしれないわね。そろそろ来るはずなんだけど……」

「あら、お呼びかしら。」

声のする方向を向くと、そこには紫色の短髪で翼の生えている少女がいた。

「ああ、遅かったわね。レミリア、あんた一人？」

「ええ。咲夜と美鈴はフランと一緒にいるわ。パチエは……来れるわけじゃないじゃない。」

「まあそうか。早速だけどお願いがあるの。」

「へえ、珍しいわね。けど大体予想がつくわ。その子でしょう？はじめてまして、私はレミリア・スカーレット。吸血鬼よ。」

そして彼女は続ける。

「ねえ、あなたは向こうから来た人間？それとも妖怪？ここにいてことは普通の人間じゃないわよね。」

「それがわからないから呼んだのよ。あんたは運命を操れるんでしょ。じゃあ未来でも見てもらったらなにかわかるんじゃないかと。」

「確かにそうかもしれないわね。やってみるか。」

レミリアさんは私の方へ向き、こう言った。

「あなた、自分が何者か知りたい？」

「はい、よろしくお願いします。」

私が答えると、「よろしい。」と言つて笑つた。とてもその表情は妖怪とは思えないほどかわいものだった。

「じゃあ、私の眼を見てね。そうすればわかるから。」

言われたとおりに私はレミリアさんの眼を見た。10秒ほどしてレミリアさんは、私から眼を離した。暗闇でよく見えないが、心なしか顔が青ざめているように見えた。

「どう、何かわかつた？」

霊夢さんが尋ねる。するとレミリアさんは静かな声でこう言つた。

「全てはきつと明日でわかる。ただ、一つ言うなら。」

そしてレミリアさんはこう続ける。

「彼女は、人間で人間じゃないわ。」と。

三日目：朝

私の正体のヒントがわかった……いやわかってないが、その後、私は博麗神社に泊めてもらった。魔理沙さんの家とは違ってきれいに整理されていて寝心地もよかった。だからなのか、私はその夜夢を見た。そういつてもそんな大した夢ではなかった。目の前に影が現われて、

『ポケットの中に入っているカードを妖怪に使え。』

と、一言言って消えていった。まったく何だったんだ。とりあえず今日は何処へ行ったらいいかわからないので、霊夢さんと話すことにした。私は霊夢さんの普段いるという部屋へ移動した。霊夢さんはお茶を飲んでいた。霊夢さんはこちらを向き、「あら、起きたのね。おはよう。」と言った。そして話を始めた。

「貴方、今日することないって言ってたわよね。今日は貴方の目が覚めたっていう再思の道へ連れて行こうと思うわ。あそこは、向こうの世界、って言ってもわからないと思うけど……幻想郷の外から迷ってくる人が多い場所なのよ。だから、貴方も外の世界の人って考えてただけだね。あそこはとても危険で普通妖怪とかに遭遇することが当たり前なのよ。だからそこに行けば理由がわかると思うわ。」

「そ、そうなんですか!?!始めて知りました……」

「朝食を食べたら出かけようと思うんだけど、どう?」

「あ、はい。お願いします。」

私たちは朝食を食べて再思の道へ出発した。道中はあまり覚えていなかったが、見覚えのあるようなところも所々あった。魔理沙さんの時とは違い歩いて行つたので酔わずにすんだ。それが一番の救いだつた。そして、再思の道にたどり着く。そこはまだ彼岸花が一面咲いていた。

「どう?何か思い出せそう?」

「……だめそうです。あ、そうだ。霊夢さん、少し待つてください。」

私はスカートポケットの中をあさってみた。そこには、夢のとおりカードが入っていた。

「ちよつとそれ見せて!!」

霊夢さんは慌てた様子でそのカードを私から奪つた。

「あの……霊夢さん。どうかしたんですか?」

「何処でこれを手に入れたの?普通の人だと持つてないはずなんですけど……」

「初めから入っていたみたいなんです。これはなんですか?」

「これは、スペルカードって言う物よ。作った人じゃないと使えないから、返すわ。」

そういつて霊夢さんは私にそのカードを返した。

「どういうものかは何かに使ってみるのが一番だと思うわ。ちよūdい相手がいればいいけど……」

霊夢さんは周囲を見渡し、誰か見つけた様子で、

「あ、いたいた。魔理沙ー!」

と言つて花畑の奥へ走つていった。しばらくすると、霊夢さんは魔理沙さんと一緒に戻つてきた。霊夢さんから話をすべて聞いたようで、

「スペルカードを使つてみるんだろ、いいぜ。私もそのスペカがどんなのか気になるからな。」

「大丈夫、スペルカードでは死なないから。安心していいわよ。あとは名前だけ……そのカードに名前書かれてない?」

私は書いてあつた文字を口に出して読んだ。

「混符『ロストスラスト』」

「馬鹿!それが起動条件だ!」

魔理沙さんが慌てて止めようとするがもう遅い。

私の右腕の中から、黒い獣の腕が出現して、私の意志など関係なしに爪で斬撃を放つ。その斬撃で魔理沙さんが真つ二つになった。

「あ……あああ……」

そして目の前で崩れ落ちる恩人と恩人を殺した罪悪感で意識が薄れていった。どうやら私は倒れてしまったようで、目の前には黒い獣の腕があつた。忌まわしきその腕からは何故か懐かしい香りがした。そこで私の意識は途切れたのだつた。

三日目：理解

どれくらいたったのだろうか、眼を覚ますとそこに殺してしまったはずの魔理沙さんが私を覗き込んでいた。

「あれ……え、わた……殺しあ……？なんでえ？」

「随分混乱しているらしいが、スペルカードでは死なないって言っただろう。死んでも生き返るんだよ。」

頭がフリーズしてしまつてよく分からないが、つまりはそういうことらしかった。

「お前が気絶したから博麗神社に運んできたんだ。」

確かに、ここは博麗神社の中の一部屋だった。

「あの黒いのはは何なんですか？なんで私の腕の中から？」

「ああ？それは……わからん。そういうやつはいないからな。あと、腕だけ変化したわけじゃないと思うぞ。」

魔理沙さんは話しを続ける。

「右眼の白目と黒目が変わつた、右眼の上あたりから黒い帯みみたいな模様が縦に出てきた。これ、お前が人間じゃないからなんだが……。あと、お前が気絶しているとき、知

らん名前を呼んでた。」

「知らない名前？」

「ああ。ずっとその名前しか呼んでなかった。私は結構幻想郷を知ってるつもりだったが全然知らないものだ。そいつの名前は、

『ロスト・デイストラリア』

……というらしい。聞き覚えとかあるんじゃないか？」

——『ロスト・デイストラリア』。思い出した、彼は私の親同然の人物だった獣。確か私が今持つてるのは彼のスペルカードだったはずだ。なのに何故私が見える？それは私が、私じゃなくてロストだから？いや、それはない。絶対無いといえる、なぜなら私はロストの姿を見たことがあるから。あれ？なんで私はロストと一緒にいるんだっけ？どれもこれもわからない。だが、あのスペルカードで私の腕はロストのものに代わる。なら、直接聞けばいいじゃないか。

「おい、なんかぶつぶつ言ってるよこ悪いが私のこと忘れてないか？」
気が付くと魔理沙さんが私のことをジト目で見つめている。

「すみません。けど、少し思い出しました。あの黒い腕は絶対ロストのだってことくらいですが。」

「またスペルカードを使えば腕が見えるか？死なないし確認できるが。」

「いや……多分大丈夫です。感覚は覚えましたから。」

そういつて眼をつむつて念じる。眼を開けると私の右腕はロストの腕なっていた。魔理沙さんは驚いたような顔をしていた。私も驚いている。いくらなんでも容量がよすぎる。まあこれで聞けるからいいが。

……………。

「邪魔するわよ。何かわかったことはある？」

霊夢さんが部屋に入ってきて尋ねる。魔理沙さんは「ああ……」と話そうとしたが私は無礼ながら右腕で制して、こういった。

「はい、すべて思い出しました。私の過去も、ロストのことも。」

「え？…なんで？」

霊夢さんと魔理沙さんは同時にそう反応する。私はそういや自己紹介ができていない。なら、彼女達に遅れて自己紹介をさせていただけよう。

「私は、アメリ・デイストラリア。複数の生命体の集まった『混ざりもの』です。」

笑顔でそう言い、私は過去を語ることにしよう。ひどく残酷で、地獄のような物語を。

過去語

私、アメリカ・デイストラリアは人間でした。今は、その人間だったころの話をします。私は人里で普通の人間の間に生まれました。金眼は突然変異だと思えます。父も母もドス黒く、光のない目をしていましたから。そんな親は、私の瞳が金色であるから、「これは私達のものだ。誰にも渡さない。」といい、名前を付ける前から私を地下室に長い間監禁していました。明かりはろうそくひとつ、親は一日2回ご飯が運ばれてくるだけ。ずっとそうだったのでその事に何も感じていませんでした。普段はそこに置いてあつた本を読んでいた。その御陰で自分の力で文字を読み書きできるようにはなりました。八年目のある日、一つの噂が流れました。

「金色の瞳をもつ少女が住む家があるらしい、その少女は疫病神だ。」という感じのです。父は噂に流れやすいタイプだったらしく、私を包丁で殺そうとしました。それを母が何故かかばい、一言私にしか聞こえないように言いました。

「今までさんざんな仕打ちをしてゴメンね。これくらいはさせて。逃げなさい。」

これはあとでわかった話なのですが、父を母も恐れていて、反論できなかつたらしいです。母は本当に私のことを愛してくれました。そして、母は死にました。そして父

は、私に向かつてこう言いました。

「ほらな、お前のせいで母が死んだ。お前のせいでな。母が逃がせというなら、逃がしてやろう。ただし、二度と俺に顔を見せるな。」

父にも母の言葉が聞こえていたらしく、私は逃げました。晴れていたのが雨になりました。体力がなくなり、倒れるまで。

そこに一匹の黒い獣がやってきて、私を背中に乗せて森の中へ入っていきました。

私が目覚めると、そこは森の中でした。そこには黒い毛で、紅い瞳をして爪の長い獣がいました。獣は落ち着いた声で、

「お前、名を何と申すか。私に何の用だ。」

と尋ねました。獣は魔法の森の端で困っている人を助けているといいました。私は今までどういう生活をしていたのかを話しました。獣はとても怒っている様子で、

「なら、お前、住むところがないのか……幻想郷は人間が一人でいると危ないからな。なら、私が少しばかり面倒を見てやろう。俺はロスト・ディストラリア、神獣と呼ばれている部類に入る。名前がないんだらう？名前がないのは不便だからな。これからお前はアメリカと呼ぶことにしよう。よろしくな、アメリカ。」

このときとても嬉しくてずっと泣いていた覚えがあります。それから、私とロストは常に一緒にいました。少しばかりとっていたのですが、私がかなり無知なことを知り

いろんなことを教えてくれました。そこで、私は七年間彼と一緒に過ごしました。ロストは私を再思の道へ連れて行ってくれました。これが三日前です。ロストが昼飯を取りに行くときを話しているときに私は妖怪に襲われて、八つ裂きになりました。食べられる前にロストが戻ってきて、妖怪を殺してくれました。ロストはいつの間にか私のことを大切に思ってた様です。ロストはすべての力を使い切り、ロストも含めてそのあたりにいる生命で私の体を作り直し、私の魂を掴んでその中へ入れました。これが、混ざりものとしての私が誕生しました。そこに一つ問題がありました。魂を入れたのはいいのですが記憶を失っていたのです。そこで、私の記憶を取り戻すためのトリガーとして、ロスト自身も私の体の中の一部になって、一つのスペルカードをポケットにしまいました。そしてロストは私の中に完全に入り込みました。

その日の夜、私は姿形を変えた状態で再び目を覚ましたのです。